

OPINION

昨年4月にこの欄で、ヨーロッパにおけるコロナまん延開始からの1年をレポートしたジュネーブ(スイス)のルジエロから、1月7日その後についてメールが送られてきた。2回にわたってご紹介する(以下、本文)。

この危機的状況が、ヨーロッパの

↑ ナヒゲーター

ビジネスや暮らしにどのような影響を与えているかを考えながら、危機の始まりからの2年間とこの冬を振り返ってみます。

今年、例年とはちよつとちがいました。通常だと、スキー場で新雪を楽しんでいるところですが。これは、コロナ・ウィルスのせいではありません。年末を義理の両親とイタ

パンデミックから2年 ヨーロッパ(上)

〇〇〇 33

リポートコロナ禍に立ち向かう
世界のいま~日本への提言~
(編集・翻訳 リーム中産連)

リアのフィレンツェで過ごしたので。実は11月末に結婚して(12月の第一週から新しい規制が始まったので、なんとか可能でした)、短いハネムーンに出かけました。ヨーロッパ

す。もちろん、ときには現地でお客様と打ち合わせをすることもありますが、経済活動は再び活発になりつつあります。オンラインの仕事は同じで、スケジュール調整を適切に行うのが難しいです。経済の大部分は、私の仕事である

をビデオ会議で行うことは、もはや珍しいことではなくなりました。さらにいえば、大規模なデジタル変革などのプロジェクトやその他の複雑なビジネスへの対応も、リアルでなくとも大きな問題なく進めることができます。

ですから、仮に数百万人もがほぼできません。今後数年間は、多くの知識集約型ビジネスにとつて、発展が鈍化して「ロングテール(長期化)」になるかもしれませんね。

しかしデジタル化できない産業分野では、それほど回復できていません。実際、政府の財政支援にもかかわらず、接客・旅行・観光・娯楽などの産業では、2020年から21年にかけてのロックダウン(強制的な閉鎖)に関連して、事業の破綻や事業継続への困難さが増加しました。

トンネルの先に光はあるのか

パ内での移動は、ワクチン接種をしていけば、まだそれなりに可能です。国境を越えるには抗原検査が必要な場合もありますが、まだなんとかあります。

経営コンサルティングを含めてですが、業務の大部分がオンライン化されることで、回復基調にあります。つまり嵐を乗り切ることができることが証明されています。実際、2年前の2020年1月には考えられなかったことです。企業が取締役会や経営会議での重要なプレゼン

一夜にして「スマートワーキング」に変更しても、デジタルによるインフラはかなり対応力があると証明されているのではないのでしょうか。とはいえ、これまでの通常ビジネスは安心だとしても、この体制で新しい

ビジネス関係を確立することは、まだです。

自身の仕事は、スイス、イタリ

ア、カナダのお客様とのオンライン

だ、ほとんど未知の領域としか見え

【スイス ルジエロ・ウィズレル】

(月曜日に掲載)